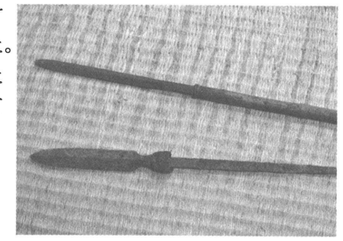
野生動物との攻防

昨年10月、伊吹山麓の「峠のシシ垣」(小泉・大久保)を、市の文化財に指定しました。伊吹地区と小泉地区を結ぶ県道の東側、標高約300m前後の台地状に張り出した通称「峠」と呼ばれる農耕地に、江戸時代の農民たちがイノシシやシカの被害から大切な耕作地を守るために作った石垣が、延長約２kmの規模で良好に残っています。

農耕地に侵入したイノシシは、一夜で農民の苦労の作物を食べつくしてしまいます。踏み込まれた稲田は無茶苦茶に倒れ、稲穂が泥につかり、獣の臭いで収穫できません。江戸時代における獣害の防除には、駆除、追い払い、侵入防止、作物の選択、環境整備、さらには神頼みとして「守り札」などがありました。これらを組み合わせて獣害対策がおこなわれてきました。駆除には、対馬藩が元禄13年(1700)から９年間おこなったイノシシのせん滅のような大規模なものもありますが、複数の村が狩人を雇って、イノシシやシカを仕留めた場合に褒賞を支払った事例があります。追い払いは、夜間に田畑を農民が見守り、大声をあげ、音を立てて追い払うものですが、次の日の農作業に影響して、大きな負担になりました。大清水・弥高・上野では嘉永６年(1853)に、大がかりな猪鹿追いをおこない、上野から139人が人足として出ています。追い払い対策として有効なのは「威鉄砲」です。イノシシは音と火薬の臭いを嫌います。江戸時代中期以降、鉄砲改めや証文、貸与の願い出などの文書が各地に残っていて、小泉地区の古文書には、領主浜松藩役所宛てに「猪鹿多分ニ出、田畑作毛喰イ荒シ申シ候。ソノ上狼徘徊仕候ニ付、威トシテ」鉄砲３挺を村で所持していることを届けています。鉄砲には玉を込めません。江戸時代の鉄砲は農具です。同じ伊吹地区で収集した「シシツキヤリ」は、鉄製の刃渡り29.8cm、幅２cm、断面は平たい三角形の細身のもので、長さ204.8cmの竹製の柄が取り付けられていました。駆除・捕獲のために常備されていたようです。

（髙橋　順之）



▲シシツキヤリ

情　報　ＢＯＸ

◆米原市教育委員会では、埋蔵文化財活用事業に伴い、下記のパンフレット、マップ、リーフレットを作成しました。

パンフレット

『北近江考古学事始め　―地域史を語り続ける埋蔵文化財―』

※昭和13年の杉沢遺跡発掘調査から始まった北近江における初期の発掘調査成果、市内の在野の考古学徒、大学との協働など新たな動きまでを紹介。22ページ。残部僅か

マップ

「米原市の遺跡ルートマップ2　―原始・古代編―」

※縄文から平安時代までの主要遺跡の所在地を地図で紹介。

リーフレット

「米原市遺跡リーフレット40～47」」

※筑摩佃遺跡、立花遺跡、ミミ塚古墳、顔戸遺跡群、北方田中遺跡、菅江遺跡、杉沢遺跡、起し又遺跡の各遺跡を写真と図版で紹介。

◆米原市教育委員会では、平成23，24年度におこなった、米原市東草野（姉川上流地域）の重要文化的景観申し出のための調査報告・保存管理計画報告書を刊行しました。

『米原市東草野の山村景観　保存活用事業報告書』

※日本の豪雪地帯の西端にあたり、雪との共生による景観や生業、峠道の流通、水利用など、いまも良好に残る山村集落を調査。

◆◆編集後記◆◆

植田文雄さんから寄稿いただきました。ありがとうございました■「東草野の山村景観」の調査を終えました。市民の皆さんのなかにも"どこ？"って思われるかもしれません■姉川最上流部にあり、いちばん北は奥伊吹と呼ばれます■スキー場があるのでピンとくる人もいますよね■ふだんで１m。多いときには４mの雪が積もる、日本の豪雪地の西端です■冬の作業場の確保のために大きく張り出したカイダレ。軒を支える持送り■雪とともに生き。雪を利用した景観や生業が魅力です（シャンギリっ子）

米原市文化財ニュース

佐　加　太　第 37 号

発　行　平成 25 年３月25日

編　集　米原市教育委員会

〒521-0242　滋賀県米原市長岡1050-1

米原市教育委員会生涯学習課歴史・文化財保護室

TEL.0749(55)8020

印　刷　ビッグバードデザイン株式会社

米原市文化財ニュース

佐加太

第 37 号

２０１３年 ３ 月 25 日

滋賀県米原市教育委員会

佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました

松尾寺の丁石　―新指定文化財―

霊仙山の山寺・松尾寺(上丹生)は、天武天皇９年(680)に役行者が雲に乗って飛来した聖観音像と十一面観音像を洞窟内に安置したことに始まります。かつて山頂に霊山寺があり、養老元年(717)、白山を開いた泰澄が本尊を安置し、神護景雲３年(769)に、法相宗の僧宣教が山麓に霊山寺七ヶ別院を建立し、松尾寺はそのひとつです。

松尾寺山(504m)中腹で威容を誇った本堂は五六豪雪で倒壊しましたが、文永７年(1270)の年号を刻んだ石造九重塔(重要文化財)がのこされています。

松尾寺には、下丹生から登る参詣道と西坂から登る参詣道があり、ともに麓の参詣口を起点として合計31基の丁石が建てられています。室町時代末のものが見られ、県内の丁石の中でも古く、本数も多いうえに、もともとの場所に良好にのこっていることから、昨年10月24日に市の文化財に指定されました。

丁石とは、一町(約108m)ごとに建立された石造の道しるべで、仏・菩薩の尊像または種子(梵字)や町数・施主・建立年月日などが刻まれています。仏教の信仰に基づく交通文化財です。下丹生参詣道の丁石は二・五・六・七・八・十の計６基がのこり、いずれも石灰岩製です。頭部にはそれぞれ梵字を刻み、その下に丁数を入れた簡素なもので、銘文はわずかに八丁石に「為善慶　梵字(バイ)　八丁　佐和山新九郎」とあります。これらとは別に、昭和初期に建立された丁石が13基あります。一方、西坂参詣道の丁石は初一丁から十八丁石まで、三・八・十一・十四・十五の５基が欠けています。初一丁から十三丁石までは石灰岩製で、十六・十七・十八丁石の３基は花崗岩製です。こちらも下丹生側同様、上部に梵字と丁数を入れ、初一丁には「願主佐和山　梵字(キリーク)初一丁　□上宗庵公」とあります。

両参詣道ともに同じ形式で、室町時代末頃の建立と推定されます。ただし、西坂の花崗岩製の３基は石質も違い、銘文の施法などから江戸時代初期の建立と推定されます。

丁石を奉納することで参詣者の便宜を図り、功徳を積みます。室町末の２基に「佐和山」の銘が刻まれていることから、彦根(鳥居本)の人物の関与が考えられます。両参詣道にあることから、このころ参詣道が整備され、一般の人の参拝が始まったようです。江戸初期のものは西坂側にあり、奉納者は近隣の樋口と番場の人です。昭和初期のものは、醒井や上下丹生の人が中心で、昭和10年の秘仏御開帳に合わせて整備されたと考えられ、醒井駅が参詣の窓口だったことがわかります。いまも「登山道保存会」が続けている整備は、室町時代から繰り返された歴史があり、寺を支えた地域社会が垣間見えます。

（髙橋　順之）

▲下丹生参詣道八丁石

特別寄稿

湖の恵み―琵琶湖の漁業史①

琵琶湖のエリ漁

ときに比良おろしの波立つ湖北の岸辺にも、水ぬるむ日がおとずれはじめました。折々の季節感に親しみつつ湖岸をゆくと、ときおり湖面につきだした杭列が見えてきます。見慣れた風景のエリは漢字では「魞」と書きますが、まさに字のとおり、魚の習性を利用して魚のほうから自然と網に入ってくる仕掛けです。

では、エリとはどのようなものでしょう。現在では湖岸近くの水深約３～15m程度の浅瀬に、合成樹脂製のポール（１本あたり５～15m）を１～２m間隔で数十から数百本を打ち込み、杭列に網をつけていきます。全長は小さいもので30m、大きいものだと700mを超えます。そして先のほうは弓矢（幅20～200m）のように広がっていて、網に沿って回遊してきた魚が入っていきます。やがて魚は、どんどん狭まった奥のほうに迷い込み、最後の一番小さい約３～５m四方の網（ツボ）に入って出られなくなります。これを引き揚げて魚を捕るというやりかたです（図１）。

最近おこなった筆者（植田）の調査では、琵琶湖全体で大小合わせ170基のエリを確認しました。小さなものは各地の漁港にある30mほどのエリで、これはブラック・バスなど外来魚駆除用です。最大は琵琶湖大橋南側の約700mのエリですが、全域では全長500m程度のものが多いようです。またエリの設置は免許制になっていて、滋賀県知事の許可が必要です。何人かの漁師さんに聞いたところでは、エリを一つ建てるには数千万円の資金が必要となり、一世一代の大仕事だということです（写真１）。

フナズシと筑摩御厨

筆者の子どものころは、琵琶湖の魚はよく食卓に上りました。しかし子どもの舌に、モロコやイサザの煮付けやフナズシがなじむことはありませんでした。でも歳を重ねてからはその味の奥深さがわかり、いまでは大好物になっています。

近江の名産フナズシは、塩漬けしたフナをご飯に漬け込むナレズシのひとつです。いまでは高級品ですが、もとは保存食として一般家庭でもよく漬けられました。酵素の働きによってご飯が乳酸菌発酵し、同時に魚のたんぱく質がアミノ酸に分解されることにより、あの「うま味」がうみだされるのです。

ところで琵琶湖のフナズシは、いつごろからつくられたのでしょう。平安時代の『延喜式』（927年）をみると、諸国から都の宮中へ贈られた特産物のなかに「鮨鮒」の名前が登場しますが、大阪の河内・摂津、九州の筑後・筑前とならんで近江国が記されています。また当時、近江国には平安京の宮中に魚介類を納める御厨という施設が３か所、網代が１か所設けられています。いわば官製の漁業組合のようなものです。御厨は大津市の瀬田・和邇と米原市の筑摩におかれました。いっぽう網代は、当時のヤナと思われますが、瀬田川下流の田上におかれました。これらのことから少なくとも1000年以上も昔、米原市からもフナズシが都に納められていたことがわかります。

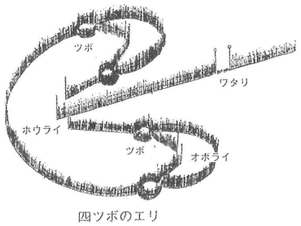
明治時代の『日本水産製品誌』では、琵琶湖のほかに岐阜県や福島・山形県などの特産品として挙げられ、もとは日本各地で親しまれた食べ物だったようです。それが今では、琵琶湖地方にのみ伝えられている希少な食文化となりました（写真２）。

またフナズシは、塩辛や魚醤とおなじ仲間の発酵食品です。魚醤とは、秋田県の「ショッツル」のようなダシ醤油のことです。同様のものは、ベトナムのニョクマムなど東南アジアでよく食べられています。約2000年前に編まれた中国最古の辞典『説文解字』には、「魚」へんに「今」と書くナレズシがあります。それは中国南方でつくられた小魚とご飯を漬けたものです。

このようにナレズシは、揚子江から東南アジア一帯にひろく分布しています。そしてフナズシに欠かせない材料の米も、この地域に起源があります。世界最古の稲モミが、揚子江下流付近の河姆渡遺跡（約7000年前）から見つかっています。日本列島に稲作が伝わったのは約2500年前のことですから、中国ではその３倍ものコメ作りの歴史があるのです。このように米と魚が結びついたナレズシのふるさとは、揚子江から東南アジア一帯にありそうです。そして、これらの地域には大きな湖があることも共通しています。

アジアのエリ

滋賀県と交流のある湖南省には、洞庭湖という中国で２番目に大きい、琵琶湖の４倍の大きさの湖があります。揚子江の中流にあって、平均的な水深は約７mと浅く広い湖です。ここにもエリがあるかもしれないと思い、2011年９月に訪ねてみました。



▲図１　エリの概略図

強風の吹き荒れる日、そこで見たのは広大な草地に突き刺された無数の竹杭に、網がつけられた状態で放置された数十のエリでした。当時は洞庭湖の水位が下がっており、私たちが立ったのはまさに湖の底だったのです（写真３）。エリの全長は50～80m程度、竹杭は５m程なので、これらのエリが操業していたのは３～４mも水かさが多い時だったと思われます。近くの溜まりには、漁師が住む家船と小さな漁船が係留されていました。そして湖中には、現在も操業中のエリ杭が波しぶきに洗われるのが見えました。つまり、渇水や満水などその時の水深に合わせて、エリをつくり分けていたことがわかります。琵琶湖のエリも、今のように大がかりになる前は竹の杭を使い、けっこう簡易につくっていたと思われます。

また湖南省の北にある湖北省を調査した時は、省都の武漢郊外の農村（応城市桃家鎮）で小さなエリを見つけました。それは50×50m程度の沼地につくられていて、長さが25m、魚を捕獲する矢の部分が25m程度のものでした。ややいびつな形ですが、両端にツボがつくられていて構造は琵琶湖の小型エリと同じです。同行した通訳によると「迷魂陣」と漢字で表し、「メイ・コン・チン」と発音するそうです。付近の農民に聞いたところ、スッポンや雑魚を捕るということでした（写真４）。

東南アジアでは、カンボジア中部のメコン川中流にあるトンレサップ湖が最大で、近くにアンコール・ワットなど美しい遺跡（世界遺産）がたくさんあります。トンレサップ湖は水深２mほどしかなく、雨季には乾季の３倍の面積にもなるといいます。乾季でさえ琵琶湖の４倍、雨季には10倍以上にもなるので、この湖がもたらす恵みは相当なものでしょう。トンレサップ村では道端でシジミや魚醤が売られ、子どもたちの遊ぶ光景は、どことなく昔の琵琶湖に通じるものがあるようでした。そしてやはり、ここにもエリ形の杭列に遭遇しました。それは長さ30mほどで、木の杭に竹の簾を立て並べたものでした。このようにアジアで見かけたエリは、どれも木や竹でつくられた簡単なものでした（写真５）。

湖北の小エリ

現在見られる琵琶湖のエリは、大きいもので数百mあります。米原市でも宇賀野沖に500mの大きなエリ（大エリ）があり、長浜市沖にも点々と見ることができます。しかし、このようにエリが巨大になったのは明治に入ってのことで、筑摩に御厨があった古代～中世は、おもに内湖に建てられた小さなエリ（小エリ）だと思われます。大エリが広まるのは守山の木浜漁師によるところが大きく、いっぽう内湖や沼地の小エリは在地の漁師が自在に建てました。米原市では、干拓される前に入江内湖に小エリがありましたが、これらは戦中・戦後の干拓事業により姿を消しました。

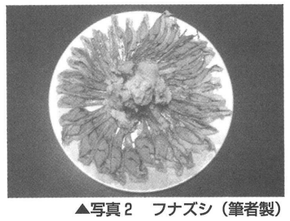
ところが湖北では、今でも小エリを見ることができます。それは、長浜市細江町地先の工業団地と湖岸道路に挟まれた沼にあります。大きさは約30mで、矢印形の仕掛けも簡単なものです。付近で釣りをしていた人に尋ねると、コイやフナや雑魚を捕るようです。アジア各地で見かけた簡単な小エリが本来の姿だとすると、このエリもまさに古いスタイルを保っているといえるでしょう（写真６）。

さて平安時代中ごろ、百人一首に登場する曽根好忠に「ささ木津に　簀がきさほせり　春ごとに　ゑりさす民の　しわざならしも」という歌があります。「ささ木津」は、現在の近江八幡市にある西の湖か旧大中の湖を示し、春の好日に漁民がエリの簀を干す情景が詠まれています。このエリも、きっと小エリだったことでしょう。

エリは淡水魚を捕るために、魚の回遊する習性を利用した漁法です。それは降雨の多いアジアのモンスーン地帯から日本列島の温帯域にかけてひろがり、琵琶湖には1000年以上も昔、稲作文化とともに伝えられたようです。フナズシなどの発酵食品がアジアで広く好まれるのも、けっして偶然ではありません。琵琶湖というフィールドには、アジアから考えさせられる多様な文化が深く埋もれているのです。

植田　文雄（佛教大学・琵琶湖博物館）

▲写真１　琵琶湖のエリ


▲写真２　フナズシ（筆者製）

▲写真３ 中国湖南省洞庭湖のエリと筆者

▲写真４　中国湖北省の小エリ

▲写真５　カンボジアのエリ

▲写真６　長浜市の小エリ